

# ふるさとの人物説明板めぐりマップ



《協力者》順不同・敬称略  
 秋山統 勝保誠 川口泰弘 五所富美子 榎井洋行 関守敏 世古明夫  
 長円寺 本覚寺 林光寺 周福寺 妙行寺  
 ※本企画展及びパンフレットは、当館学芸員・鈴木隆幸・政木愛子が担  
 当し、学芸員・渡邊美幸の協力を得ました。  
 ※会期中、一部展示替えがあります。  
 ※本パンフレット内の順序と展示順序は必ずしも一致しません。

**三島市郷土資料館**  
 〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内  
 発行日 平成19年7月15日  
 TEL055-971-8228 FAX055-981-3730  
<http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>

平成19年度 企画展

# ふるさとの人物

平成19年 7月15日(日)～  
 平成19年 9月24日(月)



**ごあいさつ**  
 三島市郷土資料館では、郷土三島に貢献された人物あるいは三島に由緒があり学術・芸術などに優れた業績のある人物を市民の方々に知っていただくため、平成7年度からそれぞれの人物に縁のある場所に説明板を設置してきました。現在では三島市内（一部函南町）に10基ほどが設置されています。  
 本企画展では説明板の人物を取り上げますが、現在の三島を形成してきた基盤ともいべきこれらの方々の方々の足跡を紹介することで、より広く郷土三島について理解を深めていただければ幸いです。

**企画展関連講座**  
**「ふるさとの人物ゆかりの地を訪ねて」**  
 三島市内に設置してある10ヶ所の「ふるさとの人物説明板」を訪ね歩きます。  
 ●講 師：迫田信行氏（三島市郷土資料館運営協議会委員長）  
 ●日 時：平成19年7月27日(金)9:00～16:00  
 申し込み・お問い合わせは郷土資料館まで。

主催 三島市教育委員会・三島市郷土資料館



なみかわごいち  
**並河五一**

**三島に塾を創設した人〈1668～1738〉**

並河五一は、寛文8年(1668)、山城国の富農の家に生まれました。若くして伊藤仁斎に学び、一流の学者として名声を高めた五一は、江戸で私塾を開き多くの門人を集めて、兵法や和歌、文武の両面に渡る幅広い学問を教授しています。

五一が三嶋明神の神主の請いを受け、三島へ来たのは57歳の時。富士山がよく見える場所に「仰止館」という漢学塾を開き土地の子弟の教育に務めました。

この頃の五一には「五畿内志」の編纂という大きな目標がありました。暮命を受けた五一は、門人らの協力のもとに五畿内(河内・摂津・大和・和泉・山城)を歴遊し、約6年の歳月を費やし「日本余地通志」中、畿内の部61巻を校了しました。〔写真は「五畿内志」(関守敏氏蔵)〕



三島市泉町6-58 本覚寺境内

せころくだゆう  
**世古六太夫**

**三島を危機から救った最後の本陣主〈1838～1915〉**



世古六太夫は、天保9年(1838)、三島宿の旧家、栗原家に生まれました。14歳の時、世古家の養子に迎えられ、本陣主として間屋役として、精力的に仕事をこなしていました。しかし、幕末維新の時代、六太夫は人生最大の山場を迎えます。

明治元年、官軍と旧幕府勢力が三島宿をはさんで対決した際、六太夫は三嶋明神の神主・矢田部式部らと両者の調停をはかり、一触即発の危機から三島を救ったのです。

明治時代、六太夫は、一転、実業家として、また、三島の教育を発展させる立役者としてめざましい活躍をみせます。明治4年に設立した私立学校に続いて、同12年には三島の小学校の前身となる新校舎設立に際し、熱心両面に及ぶ尽力を惜しまなかったといえます。また、自らは通信運輸事業を展開して、三島の郵便局の礎を築きました。〔写真は世古六太夫肖像(世古明夫氏蔵)〕



三島市芝木町7-7 長円寺境内

あきやまふなん  
**秋山富南**

**伊豆の代表的地誌「豆州志稿」「南方海島志」を編纂した人〈1723～1808〉**

秋山富南は享保8年(1723)に生まれます。多感な青年期の富南に、当時この地方で名声高かった二人の人物が大きな影響を与えています。その一人、並河五一は「五畿内志」等の編纂者で漢学塾「仰止館」を開いていました。もう一人は、籠澤寺を開いた白隠禅師です。禅師との出会いは、富南の学問に一層の深みを与えました。

代官を通じて幕府に願ひ出た州誌編纂は聞き入れられ、約12年の歳月をかけて「伊豆勝覧」「南方海島志」を出版。「豆州志稿十三巻」を完成させました。

富南が編纂した「豆州志稿」「南方海島志」は江戸時代に編纂された伊豆の代表的な地誌として知られ、今でも多くの人々に愛読、活用されています。〔写真は「豆州志稿」「伊豆海島志」(秋山統氏蔵)〕



高島町賀宮501-2 賀宮がむらみ公園内

みたじへい  
**箕田寿平**

**明治期の三島俳諧の師〈1840～1909〉**



箕田寿平は天保11年(1840)の生まれ。近代三島の俳諧の師と仰がれました。

名主の家に生まれた寿平は、経済的な環境にも恵まれて、15歳の頃には三島の高名な学者・福井雪水の千之塾に入門。学問に励み、雪水門下の高弟と呼ばれるまでに登りつめます。18歳の時には江戸へ出て、三島出身で江戸俳諧の重鎮「孤山堂卓郎」に俳諧を学びます。江戸末期、師匠の死後、その遺志を継いで、「孤山堂凌頂」を名乗ります。

明治17年には「鳴鶴社」を興し、明治30年には「俳諧研究会」を主催するなどの活発な活動を展開し、その名は天下に知れ渡ります。〔写真は句集「枯きく」(関守敏氏蔵)より〕



三島市鶴城62 両福寺門前

よくいせつすい  
**福井雪水**

**三島の教育先駆者〈1814～1870〉**

福井雪水は、文化11年(1814)7月、三島宿・長谷に生まれました。江戸で高名な儒学者山本北山・朝川善庵に学び、25歳の折に三島で漢学塾「千之塾」を開きました。

学者としての雪水はもの静かな人物。しかしひとたび講義ともなれば、実に轟かかつ明快に学問を論じ、その真摯な姿勢に塾生は感服されたといえます。

また、並山代官の招きに応じて講ずることもしばしばで、講義を聞こうと集まった多くの人々が部屋の外まであふれたと伝えられています。「千之塾」からは、明治期の三島を支える多くの人々が育っています。その一方、雪水は漢詩をたしなみ、自ら「松泉吟社」を創設、三島の文化興隆にも貢献しています。〔写真は「雪翁遺草」(関守敏氏蔵)〕



三島市日の出町2-29 紗行寺境内

はなこまひょうえもん てつきち  
**花鳥兵右衛門・楳吉**

**花鳥親子の煉乳工場〈1846～1929・1871～1899〉**



花鳥家は三島宿の久保町竹林寺小路にあって酒造業を営んでいました。長男として生まれた兵右衛門が家業を継いだのは明治12年のことです。

酪農を行うようになったのは明治18年、先達者・並山の鈴木範術から畜牛と販路を継承し、「豊牧舎」と称して搾乳・販売に着手し、煉乳工場(極東煉乳)を開きます。また同じ頃、キリスト教の影響を強く受けます。翌19年には洗礼を受け、酒造業を止めて酒舎を改造し、米人宣教師バラ女史を迎え、「香花女学校(通称、バラ女学校)」を設立しました。

この花鳥家に養子として迎えられたのが、函南の仁田家に生まれた楳吉でした。東京明治学院に学びキリスト教を受け、明治24年帰郷し、兵右衛門とともに牧畜及び煉乳生産事業に専念します。

親と子、二人の努力が結晶となって生まれたのが「金鶏印煉乳」という名称のコンデンスミルクでした。明治28年第3回国内勲業博覧会で進歩二等賞を獲得し、一躍全国に知られるようになります。その傍らで養蜂事業にも意欲を見せ、「養蜂新説」を出版するなど多方面にその才能を発揮しますが、明治32年に大志半ばにして早世します。〔写真は花鳥兵右衛門〕



三島市南二日町21-12 市営南二日町住宅公園前

よしあらしめつ こが  
**吉原守拙・呼我**

**三島の公立教育の基礎を築いた親子〈1819～1896・1840～1900〉**



吉原守拙こと齊藤勘助は齊藤雪斎の長男として駿河に生まれ、幼くして父を失い、後に母と共に伊豆古奈村(現在の伊豆の国市)に移り住みました。武士を志し15歳頃江戸に出て漢学や兵学を修めます。幕臣の山岡鉄舟、高橋泥舟らの逸材が守拙の門下に学び、名声はさらに高まります。守拙の才能は幕臣吉原雅明に愛され、後に吉原家の後継となり、明治になると三島に移ります。明治4年、近代教育の必要性をいち早く考えた三島の有志が学校創設を考え、間屋場跡に「開心亭舎」を開くにあたり、まず招請されたのが吉原守拙と呼我の二人でした。明治5年8月、学制が公布されると、「開心亭舎」は「三島学校」に切り替わり、守拙は頭等(後に校長となる)に任ぜられます。「三島の聖人」と讃えられた守拙が亡くなったのは、明治29年、77歳の年齢でした。

呼我は佐倉藩士青木直弼の二男として生まれます。吉原守拙に認められて同家の養子となり、守拙とともに三島に移り住みます。

明治4年、「開心亭舎」創設に伴い、父と共に教師として迎えられ、その後並山中学校二等教諭校長、伊豆学校(現在の並山高校の前身)に赴いています。また、三島町田町に「中権精舎」という漢学の私塾を開塾し、門弟の育成にあたりました。明治33年病に倒れ、父守拙より早く59歳という若さで没しています。〔写真は吉原守拙〕



三島市加屋町1-8 林光寺境内

ひらいげんたろう  
**平井源太郎**

**「農兵節」を宣伝し三島の名を全国に広めた〈1882～1940〉**



平井源太郎は三島の久保町(現・中央町)で酒屋を営んでいた「大宮源」の長男として明治15年(1882)に生まれました。生家は正徳時代、三島の遠藤に沢庵漬を納める大きな商売をしていました。しかし昭和初年「大宮源」は不運が続き店を閉じます。この後源太郎は「農兵節」の普及に努めました。その宣伝方法は、東京・大阪などへ赴き、「農兵節」の轡を立て、源太郎は農兵指揮官の装束である並山笠・陣羽織を着用し、大・小刀を腰に差して、近在の若者達と共に農兵躍りを披露し人目を引きました。一方、昭和9年に赤坂小梅の場でレコード化しヒットさせています。さらにこの「農兵節」とともに箱根西麓の良質な大根も一緒に宣伝し、関西へ大量に出荷されるきっかけをつくりました。また一方で、「商道改革と農村の共同化」を訴え、昭和12年(1937)には三島町議会議員に選出されました。昭和15年(1940)、58歳で亡くなり、墓は川原ヶ谷観成寺にあります。



三島市一番町1-1 白滝公園内

たきのもとれんすい  
**滝之本連水**

**幕末から明治期の地方俳諧を支えた人〈1832～1892〉**



滝之本連水は、天保3年(1832)の生まれ。生家は代々伊豆佐野の名主を務める家柄でした。連水は26歳の若さで家督を継ぎ、家業に精を出すかたわら、父であり俳人である花岳より俳句の手ほどきを受け、明治元年には師匠の連山から「俳関」の号を授けられました。

明治15年、地方俳諧の指導者として目覚めた連水は、自宅に「連梅堂」を開き、多くの門人を集めます。明治26年には生涯の結晶とも言える「雲霧集」を出版。明治31年の連水没後、自宅前には門人たちにより石碑が建てられました。

碑面には、終生富士山を愛し続けた連水の秀句「富士のふもと廻り尽くまで老いにけり」が刻まれています。〔写真は「連水肖像画」(勝保誠氏蔵)〕



三島市佐野1087

ごしょへいのすけ  
**五所平之助**

**日本を代表する映画監督・俳人〈1902～1981〉**



五所平之助は、明治35年(1902)東京に生まれます。松竹に入社、昭和の初期に「マダムと女房」、『伊豆の踊子』(田中絹代主演)と次々とヒットを出し、名監督の座を不動のものとした。ご夫人の出身地が三島であったことから、これを縁として、戦後、六反田(現・緑町)に居を構えました。

三島の記録を残そうという市民の気運(三島市民サロン)から、五所氏の演出で「わが街三島-1977年の証言」が撮影され、三島のシンボリックな作品となりました。

昭和56年(1981)79歳で逝去、三島市公会堂(現・三島市民文化会館)で三島市民文化葬が営まれました。



三島市大宮町3-20 蕨池公園内